



第8回：連合岐阜（日本労働組合総連合会岐阜県連合会）

青年委員会が取り組む、児童養護施設の子どもたちとの交流 — 「記憶や形に残る」交流活動をめざして

事務局長 森川 昌也 氏

局員（青年委員会事務局） 北島 久司 氏

連合岐阜では、青年委員会による地域貢献・社会貢献活動の中心的な取り組みとして、児童養護施設 合掌苑（岐阜県郡上市）への寄付・交流活動に長年取り組んでいる。2024年10月に開催された交流の機会（運動会）に弊所も同行させていただき、インタビューにもご協力いただいた。

また、運動会の前には、合掌苑の成澤武史苑長より、社会的養護や児童養護施設に関するお話をうかがい、施設の見学もさせていただいた。その内容についても2.で紹介する。

1. 連合岐阜の運動方針と活動の位置づけ

— まずは、連合岐阜の運動方針と、青年委員会の地域貢献・社会貢献活動の位置づけについてお聞かせください。

【森川】連合岐阜の運動方針は、「1：すべての働く仲間をまもり、つなぐための集団的労使関係の追求と、社会に広がりのある運動の推進」「2：安心社会とディーセント・ワークをまもり、創り出す運動の推進」「3：ジェンダー平等をはじめとして、一人ひとりが尊重された『真の多様性』が根付く職場・社会の実現」「4：社会連帯を通じた平和、人権、社会貢献への取

り組みと次世代への継承」「5：健全な議会制民主主義と政策実現に向けた政治活動の推進」「6：運動を支える基盤強化」という6つの柱で構成しています。

連合岐阜全体としての社会連帯活動は方針4ですが¹、方針1の取り組みの一つである「次代の労働運動を担う組合リーダーの育成」の中で、人財育成・人財発掘の場として、青年委員会、女性委員会の活動を積極的に支援することとしています。青年委員会の活動は、大きくは「①伝える・広める活動」「②仲間づくり・絆づくり活動」「③地域貢献・社会貢献活動」です。児童養護施設 合掌苑への寄付・交流活動はこの③にあたります。

青年委員会は、連合岐阜の専従局員（北島氏）が、他部門と兼務ではありますが、事務局を担って活動をサポートしています。なお、青年委員会の活動は、メンバーの思いや自主性を大切にしており、連合岐阜本部から口を出すことは通常はしていません。メンバーは非専従で普段の仕事もある中、思いをもって積極的に関わってくれており、今回の合掌苑の子どもたちとの交流のように、全国的にも珍しい独自の活動を継続して展開できているのではないかと思います。



左：事務局長 森川 昌也氏

右：局員(青年委員会事務局) 北島 久司氏

2. 児童養護施設 合掌苑に関連する活動

—活動が始まった経緯や、現在の内容について教えてください。

【北島】2006年頃、県の社会福祉協議会から紹介いただいたことをきっかけに、交流が始まりました。

合掌苑に関連する活動として、寄付や募金を毎年おこなっています。岐阜県中央メーデーでは、来場者に対して募金活動をしたり、団体バザー出店で青年委員会がチャリティバザー（リサイクル品の販売）を企画したりしています。また、メーデーでは、各組合などが作品を持ち寄って競う「プラカードコンテスト」があり、青年委員会も例年エントリーしています。入賞した場合の賞品は合掌苑に寄付しています。

交流活動は、なるべくさまざまな子どもたちとふれ合い、楽しみを共有できるよう力を尽くしてきました。また、子どもたちに寄り添いながら、社会につながる糸口となり得るよう、コロナ禍以前は、サーカス鑑賞、地元サッカーチーム（FC岐阜）との交流、工場見学・職場紹介などを開催しました。

コロナ禍後、交流を再開したいということになり、子どもたちの気持ちを一番に考えることを大切にしながら、合掌苑の職員の方々とも相談して検討を進めました。今回の「運動会」は初めての企画です。

—活動のやりがいや、困難さを感じておられることがあれば教えてください。

【北島】子どもたちの笑顔が見られ、コミュニケーションを図ることができることは大きなやりがいです。また、地域貢献・社会貢献活動として位置付けていますが、決して「GIVE」の視点でなく、「TAKE」「GAIN」につながるものだと思っています。社会や組合活動の一端にいる自分たちにとって得がたい経験になり、人としての幅が広がり、新たな視座が得られるということにもやりがいを感じています。

なお、事務局として委員会メンバーには、それぞれの子どもたちが置かれた環境や背景を想像しながら交流活動にのぞんでもらえるよう伝えています。

—これからの活動について展望を教えてください。

【北島】青年メンバー間では、「記憶や形に残る交流」をしていきたいと話しています。年々青年委員会のメンバーも入れ替わり、メンバー自体も少なくなっているなかで、活動が行き詰まってしまうないようにしたいという思いはあります。また、寄付金の原資を生み出すにあたっては、現在はイベントをつうじてチャリティバザーや募金活動を行っていますが、そのような場を今後継続することができるかも課題です。活動を停滞させることのないよう、模索していきたいと思います。また、交流活動は、苑長をはじめ施設からの理解があってこそ継続できている取り組みです。これまでの経緯を踏まえ、この活動を大切にしていきたいと思います。

◆合掌苑 成澤武史苑長より

児童養護施設は、保護者がいない児童や、養育・家庭環境に問題のある家庭の児童を保護者に代わって養育する施設であり、日本全国に約610か所あり、岐阜県内には10か所の児童養護施設、乳児院2か所があります。合掌苑は、昭和25年、曹洞宗「禅宗」北辰寺の住職であ

運動会の様子

運動会は合掌苑近くの体育館にて、午前は青年委員会との交流、午後は苑内運動会という2部制で開催されました。合掌苑では、子どもたちとの信頼の醸成にもつながることから、季節ごとの行事も大切にされており、苑内運動会も毎年おこなっておられるそうです。

冒頭では、青年委員会の小川委員長から寄付金の贈呈があり、続いて、参加した青年委員会メンバー8名が一人ずつ自己紹介をおこない、仕事の内容や今日の意気込みなどを話しました。午前の部は、しっぽとりゲーム、ドッジボール、お菓子すくいリレーというプログラム。しっぽとりゲームでは、しっぽをつけた子どもたちを青年委員会メンバーが追いかけます。声援も飛び交い、身体もその場の雰囲気も温まりました。次のドッジボールは、青年委員会メンバーと子どもの混合チームで対戦し、連携プレーで相手チームを追いつめる場面もあるなど、大変盛り上がりました。最後のお菓子すくいリレーは、小学校低学年以下の子どもは手づかみ、高学年以上は“さいばし”でお菓子をつかむというルールで、チームに分かれて競いました。委員会メンバーは、子どもたちの並ぶ列のそばとお菓子のそばに1人ずつ立ち、笑顔で声かけや応援をされていました。袋いっぱい

のお菓子を「見て！」と取材者に嬉しそうに見せに来てくれた子もいました。このお菓子は青年委員会で用意したもので、リレーで余った分は“お菓子まき”ですべて子どもたちにプレゼントされました。午前の部が終わる頃には、子どもたちと青年委員会メンバーが自然と隣に座って話す姿も見られるなど、最初と比べて距離がぐっと縮まった様子でした。

午前の部の終了後、青年委員会メンバーからは「子どもたちの笑顔がみられてよかった」「子どもたちの背景や環境を考えなければならないという難しさがあったが、今日の交流ができて自分たちも学びになった」などの感想が聞かれました。また、皆さんがとてもいい顔をされていたのが印象的でした。最後に小川委員長に青年委員会の活動について思いをうかがったところ、「組合活動は、仕事だけでは絶対に出会えない人たちと出会うことができます。これはとても貴重で、青年委員会の活動は楽しく、辛いと思ったことはありません。今日の運動会も、メンバーそれぞれが知恵を出し合って実現させることができました。交流をつうじて、いろいろな大人がいるということ子どもたちに少しでも感じてもらう機会になっていれば嬉しいと思っています。」とお話いただきました。



ドッジボールの様子



今日の感謝を伝え、子どもたちと健闘をたたえあう青年委員会メンバー

った岡本幹翁氏が、戦後孤児を預かり里親として登録したことが始まりです。その後、昭和27年に児童養護施設の認可を受けました。ここで保護する子どもたちや支援する家庭の背景は多様であり、貧困や雇用の問題なども色濃く見られ、このような田舎にある施設ですが、社

会の縮図のような側面があると感じています。

児童養護施設は、時代とともに求められる機能も変わってきました。近年、国の社会的養育の大きな方向性として、子育て世帯の支援を手厚くしていくこと、児童虐待・親子不調においても親子分離することなく支援が出来ないか、

代替養育が必要になっても里親制度によって補う、家庭養育優先の原則に則り、子どもの措置を考えています。施設においても「家庭と同様の環境における養育の推進」が求められており、合掌苑でも、職員等の配置がより手厚く、子どものプライバシーに配慮出来るホーム制を採用して現在運営しており、令和6年4月には小規模ホーム4棟が完成しました。各ホームに幼児から小、中、高校生を縦割りで、だいたい同じような構成になるようにしています。このような施設の小規模化・地域分散化は、入所児の家庭的養護推進のための動きであり、保護が必要と思われるにもかかわらず保護できていない子どもたちも多くいることから、施設は多機能化・高機能化によって、地域で困っている子ども・子育て家庭にそれまで培ってきた養育力を地域の支援に手を伸ばすことが期待されています。

これまで施設か家庭かの二択で保護に至っていた入所児が里親にも委託できる方向性を打ち出し、施設はより家庭的に入所定員を減らして、一人ひとりをより大切にと計画を進めて参りましたが、里親制度の周知や委託が進まない現実があります。

また最近では、虐待に社会的な関心が寄せられるようになってきています。令和4年度の相談件数は全国で約22万件と過去最多を記録しましたが、一時保護されるのはそのうちの3万件ほどであり、施設に入所する子どもは4000人にも満たないという現状があります。すなわち、実際の保護に至ったのは2%以下であり、98%は在宅措置といってまた同じように家庭の中で暮らしています。

少子化にはなっていますが、虐待相談は年々増加、施設の定員減、里親の伸び悩みから、保護が必要な子どもが保護できない傾向に向かいつつあり、施設の定員についても、県などと共に協議しています。

児童養護施設の子どもの進路も変化しています。30～40年ほど前までは、中学校卒業

後は進学せず社会に出ていかざるを得ない状況がみられましたが、今はほとんどの子が高校までは進学しています。ただ、その先については、家庭にいる子どもは70%ほどが進学する一方、児童養護施設の子どもの20%ほどしか進学（大学、専門学校など）できていないというのが現状です。子どもが望み、また力があれば進学ができるという状態を作っていく必要があります。返還義務のない奨学金の創設などにも尽力しています。

私は、子どもたちとの日々を作っていくために、児童養護施設があるのだと思っています。1年に1回ほど、卒業生や退職した職員が集まる機会を設けているのですが、最近参加された中での最年長は72歳の方でした。形は変わっても、ここが在り続けることで、今いる子どもたちだけではなく、ここで育った人たちも支えているという気持ちで運営しています。後世に受け継がれるような運営をしていきたいと思っています。

—（青年委員会メンバーより質問）

成澤苑長から見て、望ましい支援のあり方や、私たちが参画できる日常的なかわり方などがあれば教えていただきたいです。

【成澤苑長より】

今日のように実際に訪ねて来ていただいて、子どもたちを実際に見てもらうことがとても大切だと思います。児童養護施設は、“特別な”家庭の子ども、“かわいそうな”子どもが、就職や進学で退所するまで暮らしているというイメージを持たれていることもあるのですが、そうではありません。

不調はどのような家庭や子どもにとっても起こり得るものです。たとえばそれが親御さんの貧困問題ならば、生活を安定させ、親子の交流をしていづれ親子で生活できるようにという、「子どもの最善の利益」を大事にしていますので、一時的にこの施設で生活することになって

も、短期間で家庭に帰る子どもも多くいます。そのような形で退所した子どもたちや、就職・進学で退所したあとにアフターケアをしている子どもたちがたくさんいます。そのような現状を知っていただくことが大切だと思っています。

3. 連合岐阜青年委員会によるラジオ番組

FM わっち「ユースウェイブ」の活動

—青年委員会に関連して、FM ラジオ番組の運営と発信をされているそうですが、こちらも独自性の高い取り組みではないかと思えます。こちらの内容についてもお聞かせください。

【北島】これは青年委員会の活動のうち、「①伝える・広める活動」にあたります。初回は20年ほど前になりますが、当時の連合岐阜の役員のアシストがきっかけで、偶然に放送局との橋渡しができ、青年委員会でFM 番組をやってみようということになりました。

収録は、できるだけ負担が少なくなるよう、収録前にトーク内容を簡単に打ち合わせる程度で毎回本番に臨んでいます。筋書きなしのフレッシュな反応も親近感があって良いのではないかと思っています。MC は青年委員会の委員長が務めることが多いのですが、収録は定例の幹事会とセットで行うようにし、ほかのメンバーにも参加をお願いしています。時期に合わせて、春闘など連合運動を意識した構成にしており、ゲストを招くこともあります。

—この活動で大切にされていることや展望について教えてください。

【北島】まずは、自分たち青年委員会メンバーが自主的に運営を続けながら、その一端で労働組合である連合の運動や青年の取り組みを広めることに意義があると思っています。コミュニケーション力を養うことにもつながり、またさまざまな組合から選出されている青年メンバーの間で仲を深めるのに役立っていると思います。

今後の展望については、コミュニティ FM ではありますが、少しでも新たなリスナーが増えて、労働組合や青年委員会の取り組みをぜひ知ってもらい、多くの方に聴いていただけるような番組を目指したいと思っています。自分たちのカラーを意識して、より良い番組と青年活動として高みを目指せるようなカタチを追求していきたいです。

(編注) 収録された番組は、連合岐阜の HP で一部公開されているので、ぜひ視聴いただきたい。

<http://www.2016.jtuc-rengo.jp/gifu/activities-youth/>

組織概要

構成組織：35 産業別労働組合、5 地域協議会

組合員数：8 万人 (2025 年 1 月時点)

結 成：1989 年 11 月 24 日

URL <http://www.jtuc-rengo.jp/gifu>

(インタビュー日：2024 年 10 月 14 日)

注釈

¹ 支え合い・助け合いの活動を共有化し、構成組織・構成単組・地域協議会が取り組んでいる地域貢献活動をはじめとする社会運動を発展させていくこととしている。連合本部と連携した平和行動、ゆにふあん運動などに加え、連合岐阜独自の活動として、子どもの貧困対策を目的とする「セカンドハーベスト名古屋」「子どもがセンター」の活動支援やフードドライブ活動がある。このほか、防災・災害救援活動や労福協をはじめとする福祉事業団体との連携にも取り組んでいる。

このインタビュー連載は、2024 年 5/6 月号よりスタートしました。地方連合会の連帯活動は、組織（地域）ごとに特色があり、多様な活動が展開されています。この活動に光をあて、地域の運動がどのように紡がれてきたのか、また、これからどのように展開していくのか、インタビューをつうじて（再）発見できればと考えています。